テント一週一文（る）――　脱原発 川内テント（続）

（承前）

脱原発川内テントの資料を読んでいる間は静かだった女性は、読み終わるとまた説明を始めた。

「私も川内テントの資料を少しは持っているのよ。でもあなたの持っている方が新しいわ。私の持っているのには、蓬莱塾のことは書いていないから」

「2014 年の秋にテントを開いた時、経産省前のテントから何人で来たのですか？」

「10 人で来て、5 棟張ったのだって」

「5 張も!　大掛かりですね。場所は川内原発の正門の前ですか？」

「川内の街から、有刺鉄線の張ってある原発敷地に着く前に橋を渡るでしょう」

「はいはい、思い出してきました」

「その橋を渡ってまっすぐ進むと原発に行くの。橋を渡ってまっすぐ進まなくて、直ぐ右に曲がると久見崎町。川内川が海に流れ込む所。町の周りは海岸」

「原発の裏側？」

「裏側って言うか、北側ね」

「きれいな海岸でしょうね。ウミガメが産卵に来るぐらいだから」

「海の漂流物は打ち上がるし、流木も流れつくしで、あまりきれいじゃなかったのよ。この資料には「あれた海岸」って書いてあるから、相当なものだったようよ。以前からウミガメ監視を続けつつ海岸を一人できれいにしていた方がいて、その方と協力して海岸の清掃をしたそうよ」

「ホラ、この写真を見ると、鯉幟が泳いでいたり、大きな看板が立っていたりするじゃないですか」

「いつの写真か判らないけれど、2015 年 5 月に 5 メートルの「再稼働阻止」の看板を立ててというから、その後の写真だわね」

「5、5、5 のゾロメじゃないですか」

「アラ、そうね。きっとエネルギーが充満していたのよ。だって地元の人がたくさん手伝ってくれたそうだから」

「50 人？　15 人？」

「残念。30 人」

「30 人も。すごいですね」

「海岸清掃のイベントやテント紹介のチラシは、地元の女性が作ってくれたそうよ」

「地元には反原発のグループがあるのですね。僕も抗議集会で原発に行った時に、原発近くの家に原発反対の新しい看板が掲げてあるのを見ましたよ」

「川内原発建設反対連絡協議会のことね。川内原発の建設が始まった頃から反対運動をしているのよ。1 号機は 1970 年に建設計画発表で 79 年に工事開始だから、40 年も 45 年も続いていて……」

「40 年も前だと、僕の父も母もまだ出会っていない頃じゃないですか」

「そういう個人的なことは置いといて。薩摩川内市には「川内・露草の会」「原発いらない・命の会」などがあって、テントのメンバーと交流しているそうよ」

「あなたね、15 年 5 月に……」
「またゾロメ？」
「まじめな話よ! 川内原発再稼働を目前にして、鹿児島からこの九電前まで 311 キロリレーデモがあったのを覚えていない？」
「覚えていますよ。僕も都府楼前駅から博多駅前の出来町公園まで歩きましたよ」
「あら、あなたも歩いたの! あのリレーデモでは、川内テントのメンバーがズッと歩いたのよ」
「そうだったんですか」
「それからね……ホラ、九電へのハガキ作戦もあったでしょう」
「ありました、ありました。川内市の集会後に一軒一軒回って投函をお願いしましたよ」
「あれにもここのテントは参加していたのよ」
「ここのテントって、九電前のこのテントのことですか？」
「あなたと話していたらとても疲れるわ……。川内原発の地元の川内テントのことよ！」
「すみません……。でも疲れたのは私と話していたからじゃなくて、テントの説明がたくさんあるからじゃないですか？」
「そうそう、その通り。決してあなたのせいじゃないわ。私が説明に力を入りすぎたのよ。じゃ、川内テントの説明はこれくらいにしておくわ」
「分厚い資料をお持ちですが、紹介のために添付する資料はないのですか？」
「これはね、私の説明の虎の巻なの。虎の巻は人には見せられないのよ」
「分りました。またいつかその分厚い資料から説明してくださいね」
「はいはい」
「それはそうと、村長さんもヒゲのご老人もずいぶんお帰りが遅いですね」
「ヒゲのご老人って誰か知らないけれど、村長さんは今の時間、別の会合があってそちらに行っているのよ。私は村長さんの代役で来たのよ」
「あっ、それで今日はたっぷり時間があるっておっしゃったのですか」
「そうよ」
「まだいらっしゃるのですね」
「村長さんが帰ってくるまではね。留守番だから」
「分りました。フッ〜」　（以下次号）

（文責　栗山次郎）2017 年 7 月 31 日公開